弘前医療福祉大学紀要　7(1), 39 − 47, 2016

〔研究報告〕

老年看護学実習における学生の臨床判断能力の分析
―移乗・移動動作に焦点をあてて―

平川美和子[1)]　須崎有里子[2)]　吉田　尚代[3)]　山下　知子[4)]

要　　旨

目的：老年看護学実習において看護学生が「移乗・移動」援助を行う際の安全や残存機能の視点の臨床判断能力の実態を明らかにすることである。
方法：看護師養成３年課程２校において老年看護学実習を履修した学生を対象とし、受け持ち患者の「移乗・移動」について具体的に考えた援助方法や実施した援助方法について自由記述したレポート内容を分析した。
結果：87名のレポート内容を分析した結果、83個の単文が抽出された。「安全に留意するための視点」での記述70個のうち、「初歩的段階（30.0%）」「発達途上の段階（48.6%）」、「熟達段階（8.6%）」、「模範的段階（12.9%）」であった。「残存機能に留意するための視点」での記述13個のうち「初歩的段階（38.5%）」、「発達途上の段階（23.1%）」、「熟達段階（38.5%）」で「模範的段階（０%）」だった。
考察：「残存機能に留意するための視点」より「安全に留意するための視点」での記述が多く、「安全」と「残存機能」に留意するための視点双方の援助計画の内容は、「初歩的段階」と「発達途上の段階」が７割以上を占めていたことから、「残存機能に留意するための視点」を強化し、援助計画については個別的で具体的な援助計画をたてられるような指導方法の検討が必要であることが示唆された。

キーワード：老年看護学実習、臨床判断能力、移乗・移動動作、教育方法

Ⅰ．はじめに

看護基礎教育における2009年のカリキュラム改正では、看護学生の看護実践能力の強化を目的とすることが掲げられている。老年看護学においては、生活機能の観点からアセスメントし、看護を展開する方法を指導することが示されていて、より臨床実践に近い状況を想定した学習ができるよう、演習内容の充実を図る必要性も示されている。この生活機能の観点からアセスメントし看護を展開することは臨床判断能力ということができる。このため、臨床実践の場である臨地実習での学習効果をあげるためには、看護学生が体験し学んだことを適切に評価し、学生自身が新たな課題を発見し、それを解決できるように支援することが大切であり、併せて事前学習や学内演習の内容の検討も必要である。

筆者らは、老年看護学実習において、高齢者の特徴を踏まえて安全に配慮しながら、残存機能に留意した援助を提供してほしいと願い指導しており、老年看護学実習での体験率が高く、高齢者の特徴を踏まえた思考を必要とする「移乗･移動」援助技術に特に注意を向けている。「移乗・移動」援助技術は、転倒・転落に直結する看護技術であり、転倒・転落は看護師の日常生活援助におけるヒヤリ・ハット事例の中で最も多いと報告[1)]されている。また、看護学生の臨地実習中のヒヤリ・ハット報告[2, 3)]も多く、看護学生の臨地実習における看護実践能力を高めるための教育が特に必要であると考える。

臨床判断能力に関する先行研究で、新木ら[4)]は、日常生活動作援助における看護学生の臨床判断能力を学内演習で自己評価させ分析した結果、評価項目11項目のうち熟達段階以上が６割を超えた項目は３項目で、発達

1）弘前医療福祉大学保健学部看護学科（〒036-8102　青森県弘前市小比内3-18-1）
2）済生会川口看護専門学校（〒332-0021　埼玉県川口市西川口6-9-7）
3）さいたま市立高等看護学院（〒336-0911　埼玉県さいたま市緑区三室2460）
4）埼玉医科大学保健医療学部看護学科（〒350-1241　埼玉県日高市山根1397-1）

途上段階以下が８割を超えた項目は２項目であると報告している。山﨑ら[5]の報告は、新設短期大学における看護実践能力習得の課題抽出を行い、西谷ら[6]は、新設大学での実践報告として成人看護急性期実習における臨床判断能力の獲得に向けた指導強化の必要性を述べている。今井ら[7]は、学生が実習中行う排泄ケアに焦点をあて、最も臨床判断を要したケア場面はトイレ排泄ケア場面であったと報告している。井上ら[8]は、看護学生の老年看護学実習における要介護高齢者に対する援助関係形成のための看護過程における着眼点は、「高齢者の持てる力」、「高齢者との人間関係」、「高齢者の生活行動」、「高齢者の健康的な反応」、「高齢者の感情」の５個であると報告している。いずれも、看護学生の臨床判断能力を視野に入れた報告ではあるが、まだ実態調査の段階で具体的な教育方法の確立には至っていない。さらに、移乗・移動動作に関する臨床判断能力に焦点をあてた研究では、移動動作には、体格や状況により、個別性や即時の判断が要求される高度なアセスメント能力が必要であるという西田ら[9]の報告や、脳卒中患者の移乗時「見守り解除」における看護師の臨床判断に関する報告[10]はあるが、どちらも看護師を対象としたものである。

以上のことから、看護学生の臨床判断能力に関して「移乗･移動」援助に焦点をあてた研究はみあたらなかった。そこで、学生が「移乗・移動」援助を行う際、どの程度安全や残存機能に留意して援助を考えているかを知ることで、実習前・実習中の指導内容や指導方法への示唆を得ることができるのではないかと考えた。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は、老年看護学実習において看護学生が「移乗・移動」援助を行う際の安全や残存機能の視点の臨床判断能力の実態を明らかにすることである。

Ⅲ．用語の定義

本研究においては以下のように用語を定義し、用語の解説を補足する。

移乗：ベッドと車いす間、ベッドとストレッチャー、車いすといす、車いすとトイレなどの移乗動作とした。

移動：車いすやストレッチャーでの移送と介助歩行での移動とした。

Ⅳ．研究方法

１．研究デザイン

本研究は、看護学生の実習終了後に提出される課題レポート（以下、レポート）により得られたデータから内容を分類する質的研究デザインの内容分析である。

２．対象者

首都圏にある看護師養成３年課程２校において老年看護学実習Ⅰを履修した学生。

(1) 老年看護学実習の概要

３年課程における老年看護学実習は、老年看護学実習Ⅰ（90時間２単位３週間）、老年看護学実習Ⅱ（90時間２単位３週間）で構成されていて、１名の高齢者を３週間受持ち看護課程を展開する。老年看護学実習Ⅰは療養病棟または介護老人保健施設で２年生後期に実施され、老年看護学実習Ⅱは急性期病棟で３年生前期～後期に実施されている。

３．調査期間

2012年12月～2013年１月

４．調査内容

臨地実習終了直後に提出されたレポートの内容を分析した。レポートのテーマは、老年の特徴をふまえて受持ち患者の「移乗・移動」について具体的に考えた援助方法や実施した援助方法について自由記述したものである。

５．調査方法

実習評価確定後のレポート返却時に、研究の目的等について説明した。同意の得られた学生のみ、レポートを再提出してもらい回収した。回収後、氏名記入部分は切り取り、ID番号を振り、匿名性を確保した。

６．分析方法

(1) 分析手法

レポートの分析には、Berelson等によって開発された内容分析を用いた。内容分析はテキストのある特定の属性を客観的･体系的に同定し、推論を行うための方法で、記述された言語的コミュニケーションの分析に有効である[11]とされており、現象を現象のまま捉えることができるため、実態の解明に適している[12-14]こと、レポート分析に用いられている実績[15,16]から採用した。

今回は、実際のデータからカテゴリーを生成するのではなく、既存の理論的モデルのカテゴリーを使用することから、新木ら[4]が作成した「ADL援助の臨床判断能力」学生自己評価用紙を参考にした。この評価用紙は、演習用で評価項目が11項目あり、評価内容があらかじめ示されているためレポート内容の振り分けにはそのまま使用できないこと、また、「安全性の確認」と「ADL能力の確認」という項目はあるが、確認方法の評価項目で

あった。筆者らは、援助計画とその実施についての内容を分析対象としていたため、ADL評価項目11項目の中の「援助計画と根拠」の項目に対して、「安全に留意するための視点」と「残存機能に留意するための視点」の2つの評価項目を当てはめ、4つの段階基準に合わせて振り分けることにした。この新木ら[4]が作成した評価項目のもとになっているものは、Tanner[17]のClinical Judgmentモデルに基づくLasater Clinical Judgment Rubric[18]である。4つの段階基準は、Lasaterの臨床判断能力段階基準[18]を参考にして、初歩的段階、発達途上の段階、熟達段階、模範的段階の4段階となっており、この基準では、各段階が初歩から模範的段階に進む特徴として、一般的で部分的な観察や介入から、より個別的で相互的、焦点化された観察や介入に熟達することが示されている。これを、新木ら[4]は、「ADL援助の臨床判断能力」という視点で分類および定義づけを行っている。「援助計画と根拠」という項目においては、情報を活用し根拠が明らかで、個別的な計画が立てられたものを模範的段階と定義し、一般的な援助計画で根拠が不十分である初歩的段階から、一般的な援助計画で根拠がある発達途上の段階、個別的な援助計画で具体性が不足している熟達段階と示されている。（表1）

(2) 分析の実際

レポートの記述内容を精読し、「移乗援助に関する内容」と「移動援助に関する内容」について記述されている記述単位ごとにエクセルシートに入力して記述内容を2つに分類した。次に、「移乗援助に関する内容」と「移乗援助に関する内容」の2つに分類した内容各々について、「安全に留意するための視点」と「残存機能に留意するための視点」について記述されているかを検討し、分類した。さらに、表1に基づいて学生の記述単位を比較検討し、4つの段階基準への振り分け作業を行った。分析の妥当性を確保するために、分析のプロセスを共同研究者間で共有し、内容を協議、検討しながら分析を進めた。最後に、「移乗援助に関する内容」と「移動援助に関する内容」の援助内容別に「安全」と「残存」の項目別に4つの段階各々に占める割合を算出した。なお、移乗援助に関する内容か、移動援助に関する内容か判別がつかない記述は除外した。

7．倫理的配慮

研究の趣旨と内容および、研究への参加は任意であり参加に同意しないことにより不利益な対応を受けないこと、参加に同意した場合であっても不利益を受けることなくこれを撤回することができること、レポート内容の分析に際しては学生の記述した内容をコード化しているため個人が特定されないこと、結果を学会等で発表することを口頭で説明した。実習評価確定後、レポートを返却する際に、研究への参加の呼びかけを実施した。同意を得られた学生に、レポートを再提出してもらい回収した。回収後、氏名記入欄は切り取りID番号を振り分けた。なお、この研究は研究者所属の教務委員会にて承認を得た。

Ⅴ．結果

1．記述内容の分類

同意を得られた87名のレポート内容を分析した結果、83個の単文が抽出された。「移乗援助に関する内容」は45個、「移動援助に関する内容」は38個であった。また「移乗援助に関する内容」45個のうち35個は「安全に留意するための視点」に関する記述で10個は「残存機能に留意するための視点」に関する記述であった。同様に「移動援助に関する内容」38個のうち35個は「安全に留意するための視点」に関する記述で3個は「残存機能に留意するための視点」に関する記述であった。（表2）

2．援助内容別基準レベルの状況

まず、「移乗援助に関する内容」で「安全に留意するための視点」に関する記述のうち12個は「初歩的段階（34.0%）」、17個は「発達途上の段階（48.6%）」、3個は「熟達段階（8.6%）」、3個は「模範的段階（8.6%）」であった。同様に「残存機能に留意するための視点」に関する記述のうち3個は「初歩的段階（30.0%）」、2個は「発

表1：移乗・移動援助の臨床判断能力の段階基準一覧

援助内容	項目	4. 模範的段階	3. 熟達段階	2. 発達途上の段階	1. 初歩的段階
移乗	安全に留意した視点	個別的で具体的な援助計画である	個別的な援助計画で具体性が不足している	一般的な援助計画で根拠がある	一般的な援助計画で根拠が不十分である
	残存機能に留意した視点				
移動	安全に留意した視点				
	残存機能に留意した視点				

表２：記述内容の内訳

単位　個

援助内容		項目	
移乗	45	安全に留意した視点	35
		残存機能に留意した視点	10
移動	38	安全に留意した視点	35
		残存機能に留意した視点	3
記述合計	83		

達途上の段階（20.0％）」５個は「熟達段階（50.0％）」で、「模範的段階」の記述はなかった。次に「移動援助に関する内容」で「安全に留意するための視点」に関する記述のうち９個は「初歩的段階（25.7％）」、17個は「発達途上の段階（48.6％）」、３個は「熟達段階（8.6％）」、６個は「模範的段階（17.1％）」であった。同様に「残存機能に注意するための視点」に関する記述のうち２個は「初歩的段階（66.7％）」、１個は「発達途上の段階（33.3％）」、「熟達段階」と「模範的段階」の記述はなかった。（図１）また、段階別の一部抜粋した記述内容を表３に示した。

３．安全と残存機能の視点別の基準レベルの状況

83個の記述を「安全に留意するための視点」と「残存機能に留意するための視点」で分類した場合、「安全に留意するための視点」に関する記述のうち21個は「初歩的段階（30.0%）」、34個は「発達途上の段階（48.6%）」、６個は「熟達段階（8.6%）」、９個は「模範的段階（12.9%）」であった。また「残存機能に留意するための視点」に関する記述のうち５個は「初歩的段階（38.5%）」、３個は「発達途上の段階（23.1%）」、５個は「熟達段階（38.5%）」で「模範的段階」の記述は無かった。（図２）

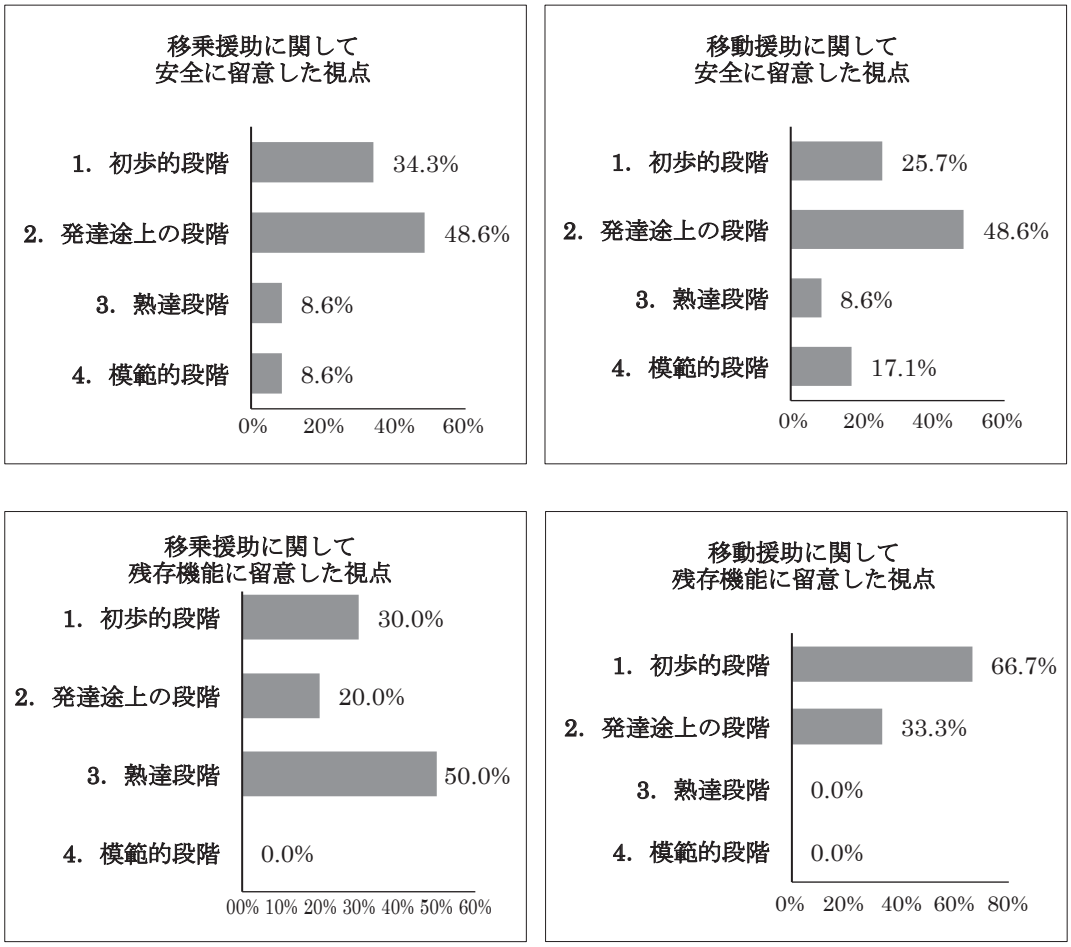

図１：援助内容別臨床判断能力の段階別割合

表３：援助内容別の臨床判断基準の段階別記述内容（一部抜粋）

単位　個

援助内容	項目	4. 模範的段階 個別的で 具体的な 援助計画である		3. 熟達段階 個別的な 援助計画で 具体性が 不足している		2. 発達途上の段階 一般的な 援助計画で 根拠がある		1. 初歩的段階 一般的な 援助計画で 根拠が 不十分である	
移乗	安全に留意した視点	3	・体格がよいため側臥位にした後肩下膝下に手を入れ起き上がりを援助し、2人で移乗した ・支えれば起き上がれるので柵をつかんで貰い遠心力で起き上がらせ、車いすとベッドの距離を短くした	3	・前傾姿勢がとれるように手すりにつかまってもらい脇の下に手をいれ声掛けをした ・自力で立位のとれる患者のため声掛け誘導で次にやることを伝えながら行った	17	・足腰の筋力低下があったため立ち上がりの際臀部を抱えるようにした ・立位が不安定であったので軽く支えながらゆっくり移乗した	12	・移乗可能であるが転倒のリスクが高く移乗時に見守りを行った ・足で踏ん張れるように足底がつく位置に足を置いた
	残存機能に留意した視点	0	（－）	5	・端坐位までは自力で行ってもらい座位バランス強化のため座位時間を長くした ・リハビリ中で立位動作を自力でしようという意思があったので少ない介助を心掛けた	2	・立位保持が可能であったため、移乗時端坐位から立位は自分でおこなってもらった ・座り直しは自分で行えたため声をかけて座り直しができるようにした	3	・車いすに移乗できる方だったので移乗してもらった ・ADL維持のためできるところは自分でおこなってもらった
移動	安全に留意した視点	6	・心不全があったため呼吸や表情を確認しながら歩行に付き添い、ペースが速くなったときにはゆっくりにするよう声をかけた ・眩暈によるふらつきが予測されたので一歩一歩ゆっくり歩いているか確認し、歩行姿勢が良くなっているときには良くなっていることを伝えた	3	・杖歩行訓練中、足の運びがわからなくなってしまうので横で声をかけながら行った ・頸椎カラーをしていたので階段や段差に注意するよう声をかけながら行った	17	・右側空間無視があったため右側に位置し声をかけた ・立ち上がり時に車いすのブレーキをかけ忘れることがあったのでその都度促した	9	・杖歩行時杖とは逆の位置で腰を支えながら介助した ・転倒しそうになったらすぐに支えられるように腰部に手を近づけておいた ・自立度が高いが転倒のリスクもあるため立ち位置に注意した
	残存機能に留意した視点	0	（－）	0	（－）	1	・車いすは自走可能であったので自分でやってもらった	2	・疲労があるときには自走ではなく介助した ・車いすのブレーキは自分で操作してもらった
記述合計		9		11		37		26	

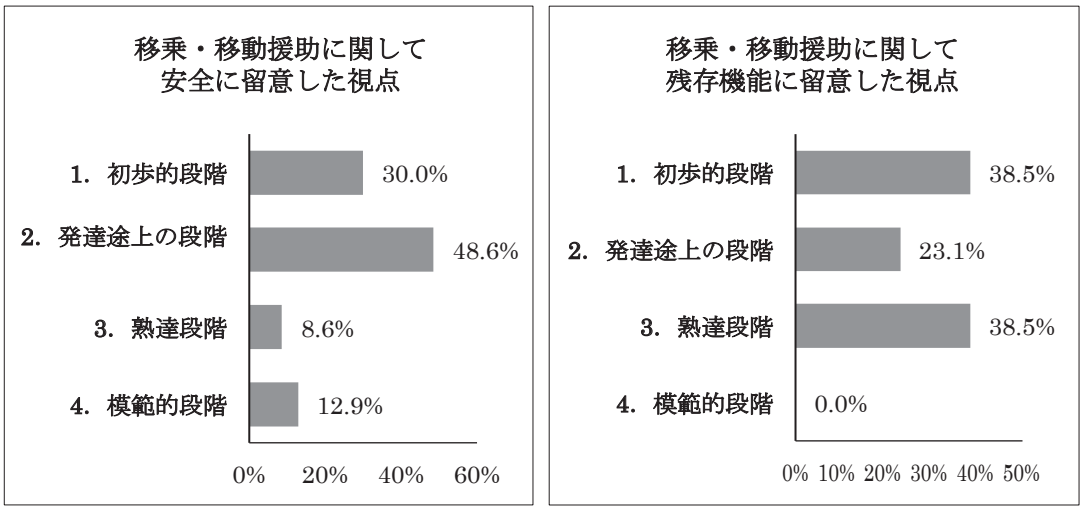

図２：安全と残存機能別臨床判断能力の段階別割合

Ⅵ．考察

老年看護学実習で看護学生が「移乗・移動」援助を行う際の安全や残存機能に関する臨床判断能力の実態について、これまでの結果をもとに考察し、教育の方向性を見出す。

１．記述内容の分類から見えてきたこと

「移乗援助に関する内容」と「移動援助に関する内容」割合については大きな違いがない。これは、移動援助の前後には移乗援助が発生していることから当然の結果であると言える。同時に、学生は各々の援助を計画し、実践していたと推察できる。また、移乗および移動の援助双方とも「安全に留意するための視点」の記述は、「残存機能に留意した視点」の記述よりも多いことがわかった。これは、「移乗・移動」の援助技術は転倒・転落というヒヤリ・ハット事象と関連が深く、実習指導者や教員の指導頻度が高いことから、学生が「安全に留意するための視点」を常に持つことができていたのではないかと考える。

一方で、「残存機能に留意するための視点」の記述の少なさは、学生にとって高齢者の残存機能に留意することは困難であることがわかる。これについて安田ら[19]は、学生は高齢者の持てる力を知る必要性を感じながらも、学生自身の力ではうまく情報が得られないという内容が調査データから得られたと報告している。これまで、加齢に伴う高齢者の身体的変化に対する理解を深めることを目的に、高齢者疑似体験を事前学習に取り入れていたが、今後は、高齢者疑似体験を通して、高齢者の残存機能に視点を向けさせることを目的とした事前学習を検討する必要があると考える。松本ら[20]は、実習前後の技術演習の学びから実習前は具体的な技術指導と患者体験が有効であると述べていることから、移乗・移動の援助技術の演習では、テクニックだけでなく、疑似高齢者の状態で患者役を体験させ、残存機能の活用という視点を意識させ、援助について考えさせる課題演習も有効ではないかと考える。

２．援助内容別基準レベルの状況から見えてきたこと

「移乗援助に関して安全に留意した視点」の記述内容と「移動に関して安全に留意した視点」の記述内容の双方とも、「発達途上の段階」の記述が最も多い。このことから、学生は、一般的ではあるが根拠がある援助を立案し、実施することができていると推察される。また、「移乗援助に関して安全に留意した視点」の記述内容は、「初歩的段階」と「発達途上の段階」を合わせて８割を超えており、「移動援助に関して安全に留意した視点」の記述内容も同様に７割を超えていた。これらのことから、「移乗・移動」の援助に関して学生は、「安全に留意した視点」においては、根拠がある一般的な援助計画を立案し、実施できているが、個別的な援助計画の立案や実施は不十分であることが推察される。一方で、「移乗援助に関して残存機能に留意した視点」の記述内容と「移動に関して残存機能に留意した視点」の記述内容は全体数が少ない。そのため、断定はできないが、「安全に留意した視点」の記述内容と同等の基準レベルであると言える。

援助内容の基準レベルを一般的な援助計画から個別的な援助計画にアップさせるには、やはり、具体的な事例提示による事前学習が必要になると考える。佐藤ら[21]は、実習初日の学内演習に受け持ち患者情報を取り入れることで、対象理解や援助場面をイメージすることはできるが、看護の視点としての学びは少ないため、リアリティを高める演習環境が必要だと述べている。具体的な事例提示には実習施設ごとの受け持ち患者事例を蓄積し、演習の際の患者設定としての活用、さらにシミュレーターによる疑似高齢患者を演じ、個別性のある援助計画を意識させることで、リアリティのある患者設定になり、学生も一般的な援助から個別的な援助を立案する視点を育てることに繋がるのではないかと考える。

３．安全と残存機能の視点別の基準レベルの状況から言えること

「移乗・移動援助に関して安全に留意した視点」に分類された記述内容は70個と多いが臨床判断能力の段階基準の内訳の割合「発達途上の段階」が最も多く、援助内容別に見たときと傾向は変わらない。また、「初歩的段階」と「発達途上の段階」を合わせて７割を超えており、学生の臨床判断の基準レベルは一般的援助計画のレベルであることも同様である。「移乗・移動援助に関して残存機能に留意した視点」に分類された記述内容は13個と対象数は少ないが、段階基準の内訳の割合をみると「初歩的段階」と「熟達段階」が同じ割合であることが特徴的である。「初歩的段階」と「発達途上の段階」を合わせると６割以上であり、安全の視点と同じ傾向と言える。ただ、「熟達段階」が「初歩的段階」と同じ割合であった理由として、残存機能の視点は必然的に患者の個別性に目を向けることになるため、具体的ではないが個別的な援助計画を立案、実施できていたのではないかと推察される。「残存機能に留意した視点」の記述内容を増やすために、まずは、安全の視点と結びつけながら、残存機能の視点を学生が意識できるような指導が必要になると考える。そのために、リアリティのある患者設定が必要ということになるが、疑似高齢患者を演じさ

せることだけでなく、近年、リアリティに近い状況を作りだすための教育方法[22, 23]として注目されている模擬患者の導入も選択肢として考える必要がある。

Ⅶ. 結論

看護師養成3年課程の学生の老年看護学実習の「移乗・移動」援助における安全や残存機能の視点の基準レベルに関する研究から明らかになったことは以下の通りである。

1．老年看護学実習において「移乗・移動」援助に関する内容は、「残存機能に留意するための視点」の記述よりも「安全に留意するための視点」の記述が多かった。
2．「安全に留意するための視点」に関する記述内容の基準レベルは「初歩段階」と「発達途上の段階」で7割以上であり、「熟達段階」や「模範的段階」へのレベルアップの必要性が示唆された。
3．「残存機能に留意するための視点」を高めるための指導方法検討の必要性が示唆された。
4．「安全に留意するための視点」と「残存機能に留意するための視点」の双方について個別的で具体的な援助計画をたてることができるような指導方法検討の必要性が示唆された。

本研究の限界と今後の課題

本研究は看護師養成3年課程の学生を対象とした調査であり、4年課程の学生との違いは明確になっていない。また、実習時期において、他領域との経験時期における影響要因を考慮した調査になっていないため、看護学生全般の傾向として述べることはできない。

今後は、4年課程においても同様の調査を実施すること、さらに実習時期における影響を考慮した分析を行うことで一般化できるよう務め、より適切な指導が行えるようにしたい。また、その際に移乗と移動を分ける必要があるかどうかについても検討したいと考える。

謝辞

本研究の実施にあたり、快く協力していただいた学生のみなさまに心より感謝申し上げます。

本研究は第45回日本看護学会―看護教育―学術集会において示説発表した内容を加筆修正したものである。

（受理日　平成28年2月12日）

文献

1）川村治子：ヒヤリ・ハット11,000事例によるエラーマップ完全本（第1版），医学書院，2003
2）半崎めぐみ，尾崎道江：病院実習における看護学生のヒヤリハットの実態とその要因，日本看護学会論文集―看護総合―，42：346–349，2012
3）畠山加奈子；臨地実習におけるヒヤリハット体験時の実態調査―学生の感情と振り返りに焦点を当てて―，北海道医療大学看護福祉学部学会誌，8(1)：51–55，2012
4）新木真理子，東玲子，相野さとこ　他：日常生活動作援助における看護学生の臨床判断能力―学内演習を通して―，西南女学院大学紀要，16：1–14，2012
5）山崎美恵子，梶本市子，矢野智恵　他：看護基礎教育課程における学生の看護実践能力習得の課題に関する報告，高知学園短期大学紀要，41：73–80，2010
6）西谷千恵，山田豊子：成人看護学急性期実習の現状と課題，中京学院大学看護学部紀要，4(1)：39–50，2014
7）今井宏美，井上映子，大谷眞千子　他：老年看護実習における学生の臨床判断の特徴―排泄ケア場面の分析―，千葉県立衛生短期大学紀要，26(1)：105–109，2007
8）井上美代江，太田節子：介護老人福祉施設に入居する要介護高齢者に対する看護学生の援助過程における着眼点．聖泉看護学研究．2：41–49，2013
9）西田直子，國澤尚子，水戸優子　他：日本看護技術学会第8回学術集会報告　交流セッションⅤ看護師の移動動作の援助と困難，日本看護技術学会誌，9(1)：33–35，2010
10）髙柳智子，泉キヨ子：脳卒中患者の移乗時「見守り解除」における看護師の臨床判断―中堅看護師を対象としたフォーカス・グループ・インタビューを通して―，日本看護研究学会雑誌，36(2)：69–77，2013
11）舟島なをみ，杉森みど里：看護教育学における質的帰納的研究方法論　開発研究のための理論的枠組みの構築，千葉看護学会会誌，3(1)：8–14，1997
12）Klaus Krippendorff：メッセージ分析の技法「内容分析」への招待（Keiso communication）（第1版），三上俊治，椎野信雄，橋元良明訳：東京：勁草書房，1989
13）乙幡美佐江：ソーシャルワーク研究における質的内容分析法の適用，社会福祉学評論，13：1–16，2014
14）上野栄一：内容分析とは何か―内容分析の歴史と方法について―，福井大学医学部研究雑誌，9(1)：

1–18，2008
15）福田友栄，杉森みど里：大学における授業評価に関する研究　レポートの内容分析を通して，日本看護科学会誌，9(3)：96–97，1989
16）日下知子，曽谷貴子：精神看護学実習におけるポートフォリオ導入の試み―実習振り返りシートの枠組み作成による援助関係を展開する能力の特徴―，川崎医療短期大学紀要，32：1–6, 2012
17）Tanner. C. A.: Thinking like a nurse: A Research-Based Model of Clinical Judgment in Nursing, Journal of Nursing Education, 45(6), 204–211, 2006
18）Lasater. K.: Clinical Judgement Development: Using Simulation to Create an Assessment Rubric: Journal of Nursing Education, 46(11), 496–503, 2007
19）安田千寿，北村隆子，畑野相子：フィジカルイグザミネーションを用いた老年臨床看護論実習Ⅱの学習効果，聖泉看護学研究，2：33–40，2013
20）松本明美，橋本知子：老年看護学実習における技術に関する実習前・後指導の有効性について，足利短期大学研究紀要，28：109–114，2008
21）佐藤美恵子，荒木美千子，佐藤サツ子：老年看護学実習における事前に提供された受け持ち患者情報を活用した演習取り組みの効果―受け持ち患者情報から見つける看護の視点―，日本赤十字秋田看護大学紀要，17：13–22，2012
22）本田多美枝，上村朋子：看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察―教育の特徴および効果，課題に着目して，日本赤十字九州国際看護大学 IntramuralResearchReport, 7：67–77，2009
23）原島利恵，渡辺美奈子，石鍋圭子：看護における模擬患者を活用したシミュレーション教育に関する文献検討，茨城キリスト教大学看護学部紀要，14 (1)：47–56, 2014

Analysis of Clinical Judgment by Nursing Students in the Gerontological Nursing Practicum
− A Focus on Transfer and Movement −

Miwako Hirakawa [1], Yuriko Suzaki [2], Hisayo Yoshida [3], Tomoko Yamashita [4]

1) Hirosaki University of Health and Welfare: 3-18-1, Sampinai, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8102, Japan
2) School of Nursing Saiseikai Kawaguchi: 6-9-7, Nishikawaguchi, Kawaguchi-shi, Saitama, 332-0021, Japan
3) Saitama Municipal Advanced Institute of Nursing: 2460, Mimuro, Midori-ku Saitama-shi, Saitama, 336-0911, Japan
4) Saitama Medical University Faculty of Health and Medical care School of Nursing: 1397-1, Yamane, Hidaka-shi, Saitama, 350-1241, Japan

Abstract

Purpose: The purpose of this study is to clarify the extent to which nursing students in gerontological nursing practicum are capable of making clinical judgments in regards to safety and residual function when assisting with the transfer and movement of patients.

Method: Second-year nursing students in two three-year nursing school programs provided written reports regarding their thoughts on how to help in the transfer and movement of patients under their care. We then analyzed the contents of these reports.

Results: 83 sentences were selected from amongst the 87 reports submitted. Of the 70 sentences that showed a 'consideration of safely' perspective, 30% were considered to be at a 'beginning level,' 48.6% at a 'developing level,' 8.6% at an 'accomplished level,' and 12.9% were at an 'exemplary level.' As for the 13 sentences that touched on 'residual function,' 38.4% were at a 'beginning level,' 23.1% were at a 'developing level', 38.5% were at an 'accomplished level,' and there were zero at an 'exemplary level.'

Conclusions: This study suggests first that since most students wrote from the perspective of a 'consideration of safely' rather than 'residual function' and second that more than 70% of those students who did comment on "residual function' did so at either a 'beginning level' or 'developing level,' it will be necessary to provide a training program for nursing students that pays more attention to 'residual function.' It will also be necessary to consider methods of educational guidance that will enable nursing students to develop more individual and concrete care plans.

Key words: Gerontological Nursing Practicum, Clinical Judgment, Transfer and Movement, Educational Guidance